

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.208 ISSN 2432-5295

特集 はるばる

C O N T E N T S

- ◆特集：【はるばる】・・・01
 - ・スロベニア共和国の来訪神クーレントの伝統行事・・・02
 - ・中国・杭州のナイトエンターテイメント「印象西湖」・・・03
 - ・よかところじゃった鹿児島・・・03
 - ・ポートランドってこんなまちだったんだ・・・04
 - ・クリスマスに合わせてインドのムンバイ（旧ボンベイ）に行ってきました・・・04
- ◆今、こんな仕事しています・・・05～07
- ◆近況＆イベントのお知らせ・・・08～10
- ◆まちかど・・・裏表紙
 - ・アルパックのルーツを巡る旅

(写真) ムンバイの浜辺 撮影：片野直子



特集 はるばる

「はるばる」は、一義的には距離が非常に離れている様を表す言葉です。そして、その様には「彼の地↓此の地」と「此の地↓彼の地」があります。「はるばる」来た函館と、「はるばる」のぞむイスカンダルの違いです。

「はるばる」は、漢字で書くと「遥遥」。時空を超えた遙かなる距離をイメージした時、雄大な、そしてどこか、のどかな気持ちになりませんか。

今号の特集では、彼の地からはるばる寄せられた便りと、此の地からはるばる馳せた思いを両方ご用意しました。なにかと慌ただしい年度末から年度始めですが、本特集を読んで「遠い目」になっていただければ幸いです。



スロベニア共和国の来訪神

クーレントの伝統行事

岡崎まり
地域再生デザイングループ

来訪神は世界各地に存在しています
が、そんな中、スロベニア共和国の
来訪神であるクーレント (Kurenti)
が "Door-to-door rounds of Kurenti"
として平成29年12月にユネスコ文化
遺産に登録されました。

クーレントはキリスト教の
Candlemas ※注 から Ash Wednesday
※注 までの期間に行われるスロベニ
ア共和国の北東部の都市プトウイ
(Ptuj) に伝わる伝統行事です。厳



意表をつく独特な衣装で踊る

しい冬を追い払い、春を呼び込むと
ともに、訪れた家には幸福が訪れる
とされています。

その装いは一度目にと忘れ
ることができません。地域によつて差
異がありますが、毛皮を身に纏い、
腰には大きな5つのカウベル、そし
て頭には独特な仮面を付けていま
す。仮面は耳が七面鳥または鴛鴦の
羽ででき、長い舌は織物や革、歯は
豆で作られています。その他の顔の
パーツも藁や木の皮、動物の皮など
で作られ、頭にカラフルな短冊状の
帯をつけています。

クーレントはこの格好で家から家
へと練り歩き、家主の周りを囲ん
で飛び跳ねて踊ります。

私は現在、夫の仕事の関係でスロ
ベニア共和国の首都リュブリャナ
(Ljubljana) で暮らしています。リュ
ブリャナからクーレントが現れるプ
トウイまでは車で1時間半程度。今
回、クーレントに会いにプトウイへ
行ってきました。

私がクーレントが現れるのを待つ
ていた場所は Turnišče castle という
所です。この時期のプトウイの平均
気温は0度と非常に寒いですが、クー
レントが現れると聞いていた時刻よ
りも少し早めに行ってみると、地域
の人がすでに集まり、ワインやパン
などを食べて盛り上がりつついました。



まちのカーニバルでも行進するクーレント

スロベニア人は非常に寛容で人懐
こい人が多く、よそ者の私達にもパ
ンなどを勧めてくれ、クーレントが
現れるのを一緒に待ちました。

子ども達の中にはクーレントに仮
装をしている子もいて、小さい頃か
ら地域のアイデンティティーに親し
んでいるように感じました。

時刻が近づいてくると15分置き
くらいに男の人3〜4人が木と縄で出
来たスティックを空高く振り回し、
パンパンと音を鳴らしはじめました。

そしてしばらくすると遠くから
カウベルの音が微かに聞こえ始め、
段々大きくなっていったかと思
うと、目の前に20体以上のクーレント
が現れカウベルの大きな音を鳴ら
しながら家主を囲って踊り始めま
した。(弊社ホームページ上に動画
を載せていますのでぜひ御覧ください
い。URL: <http://www.arpak.co.jp/newsletter/208/02.html>)

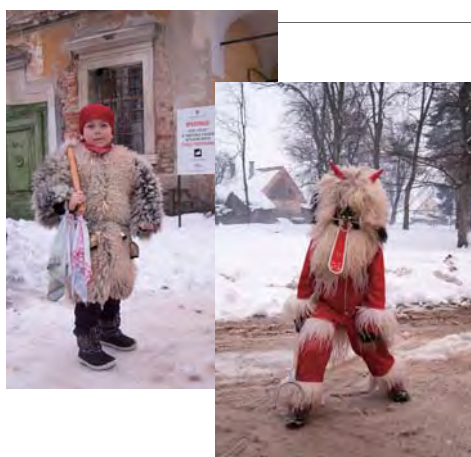
踊りが終わると仮面を外し、その
場を少し飛び跳ねながら回っていま
したが、体からは重い衣装を着て
踊っていたので湯気が立ちのぼり、

この会場の熱気を象徴しているよう
に感じました。

これまで海外を旅行して街並みや
建物等を見て回ったことはありまし
たが、伝統行事を見たのは初めてで
した。信仰等、異なることも多いで
すが、古来から続く伝統行事をみる
と、季節の移り変わりを尊び、地域
住民の幸福を願い、災厄をはらうと
いった同じ目的・価値観が受け継が
れてきており、根底にある願いは万
国共通なのだと実感しました。

また、仮面や衣装の様相は日本と異
なりませんが、鳥の羽や藁、皮等、その
地域で取れる自然素材から作られてお
り、例えば日本の来訪神である吉浜の
スネカは腰にアワビの殻をさげている
など、共通点と伝統行事が伝わる地域
の特徴からくる違いを見比べることに
面白さも体感しました。

注: Candlemas は2月2日のこと。
また Ash Wednesday (灰の水曜日)
はキリスト復活祭にあわせて設定さ
れるため、毎年日程が異なるが今年
は2月14日であった。

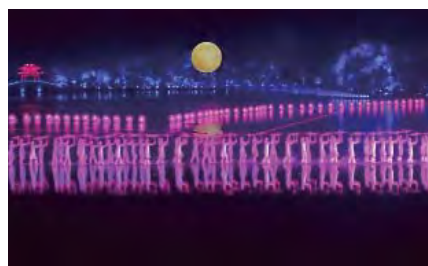


Kurent に仮装をしている子ども達: 小さい頃から地域のアイデンティティーに親しんでいるように感じる

中国・杭州のナイトエンターテインメント「印象西湖」

高田剛司

地域産業イノベーショングループ



湖上で踊る幻想的な風景



歴史的街区の街並み



復元した地区は人工的すぎる面も

杭州は1996年に個人旅行で訪れたことがありましたが、約20年の時を経て、街の姿貌ぶりにびっくりしました。西湖周辺には複数の歴史的街区が再整備・復元され、カフェやレストラン、雑貨やお土産などのショップが次々と開設されています。一言でいうと、「洗練された観光地」としての整備が一気に進んでいるという印象を持ちました。訪れたときが中国国内で休日だったこともあり、非

昨年、フードツーリズムを研究する会のメンバーと一緒に、中国・杭州を訪問してきました。杭州は、上海から新幹線で1時間ほどの距離にある浙江省の省都です。世界遺産で有名な西湖があり、特産の龍井茶や美食都市としても知られています。また、経済的発展の目覚ましい都市のひとつであり、電子商取引大手のアリババの本社も立地しています。

常に多くの観光客で賑わっていましたが、それが日本のように、外国人中心ではなく、圧倒的に国内観光客であったことに違いを見せつけられました。美味しい杭州料理にも舌鼓を打ちましたが、食以外で特に印象深かったのは、西湖を舞台にしたナイトエンターテインメントです。北京オリンピック開会式の監督だった張雲謀（チャン・イーモウ）等が手掛ける「印象西湖」の舞台は、湖上での音と光の演劇を100人以上の役者が演じ、スケールの大きな物語を体験しました。インバウンドが急増している日本でも、ナイトエンターテインメントの重要性が指摘され、様々な試みが行われています。野外において、その土地の景観を生かしたアトラクションを提供することは、その国や地域の文化を理解する点において、極めて有効であることをあらためて実感しました。

よかところじゃった鹿児島

増見康平

建築プランニング・デザイングループ

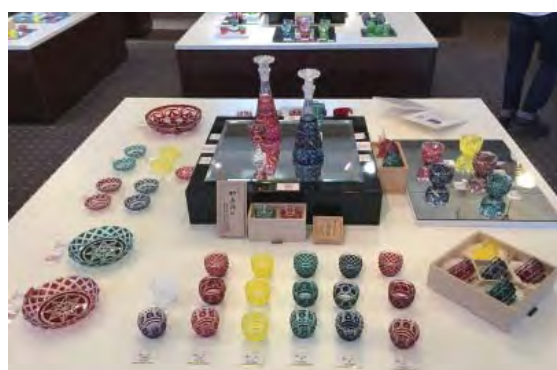


「アーバンエッグ」を実現した稲盛会館

NHKドラマ「西郷どん」の舞台でも話題となっている鹿児島で、時代を超えて生き続ける建築の生き様と伝統工芸品に出会いました。

■オープンハウスカゴシマ

オープンハウスカゴシマは、鹿児島の近現代を象徴する、社会的・文化的資産として重要な建築を鹿児島県全域で公開する取り組みです。なかでも、興味を惹かれたのが稲盛会館でした。昭和63年、安藤忠雄氏により大阪中之島プロジェクトとして発表された「アーバンエッグ」が遠く鹿児島で実現されて



色鮮やかな薩摩切子

いました。卵型のコンクリート打放しは、言葉では形容しがたい迫力と美しさを感じました。

■心を奪われた薩摩切子

1850年代に長崎等から伝来したガラス製造書物から作られた薩摩切子。当時、赤色のガラスをつくることが大変難しく、数百回の試作を経て、その技術が確立されたそうです。江戸時代は「薩摩の紅ガラス」と称され、非常に高価なもので、私にはとても購入できる価格ではありませんでした。しかし、とても綺麗な色彩、美しい切子の模様に圧倒され、薩摩切子に魅了されてしまいました。帰阪後も薩摩切子への想いは色あせることはないの、薩摩切子を購入する決意と予算を持って、鹿児島に訪れる機会を今か今かと探っているところです。

ポートランドってこんなまちだったんだ

坂井信行

都市・地域プランニンググループ



駐車場外周の屋台

2点目は賑わいの連続。店の前の歩道はお金を払えば客席などに利用可能でオープンカフェも簡単。駐車場で賑わいが途切れないよう、通りに面した部分には屋台がお店を出していました。アイデアですね。低層部はお店の中が見える構造にするようガイドラインが定められてい

全米一住みたい、あるいは住みたいまちとして、また先進的なまちづくりでも注目度の高い米オレゴン州のポートランドの視察レポートをお届けします。

まずはミクスْتُユース。ポートランドの街区は60メートルのグリッド。京都田の字エリアの120メートル、大阪船場の80メートルに比べると小ぶりです。まちを歩くと1分以内に街角があります。この街角を生かして、職住商学がミックスされた歩けるまちづくりがこのまちの最大の魅力です。これは有名な話。

3点目はベイ・トゥ・パーク。車でも便利に買い物できるような短時間の路上駐車を認めています。これは意外。おかげで通りは路上駐車で埋め尽くされています。歩道を歩く歩行者へのバッファという苦しい説明も。しかしどの通りも豊かな街路樹が街並みを救っていました。



ボードウォークの向こうに路上駐車の流れ

4点目はローカル・ファースト。まちづくりは住民が最優先、観光客は最下層だそうです。さすが全米一住みたいまち。しかし、一方ではジェントリフィケーションが進み、歩道や公園にはホームレスの姿も。これは知りませんでした。

日本でも紹介されることの多いポートランドのまちづくりですが、実際に行ってみると意外な点もいろいろありました。日本からはるばる思いを馳せるだけではわからないことも多いです。

クリスマスに合わせてインドのムンバイ(旧ボンベイ)に行ってきました

片野直子

アルパック OG



クリスマスのごちそうランチ

イギリスに留学している間、仲良くなったインドの友人たちは、温かく気持ちの良い人ばかりで、そのおらかさに何度も助けられました。彼らを育てたインドという国を一度見てみたい、そんな思いを胸にムンバイへ向かいました。

訪れた友人の家族は熱心なカトリック教徒ですが、イスラム寺院に隣接した集合住宅の一角に住んでおり、朝5時から窓枠がブルブル震えるくらいの大音量でコーランの唱和が始まります。何年も聞いていると気にならなくなるのだとか。

到着早々にクリスマスの準備として、友人一家の出身地である南西部のゴア州の料理と一緒に仕込みました。かつてゴアを統治していたポルトガルに由来する、豚の肉と内臓を酢とスパイスで煮込んだ「ソル・ポテル」

イブの夜には一家の通う教会で催された真夜中のミサに参加し、カラフルなインド風の衣装で着飾った聖歌隊のコーラスを楽しみました。翌日は朝からカトリックのご近所さんが代わる代わる訪ねてきて、グアバやココナッツでできたお菓子を交換し、ソル・ポテルを振舞ってお祝いしました。

家の中はクリスマススムード一色ですが、ペランダから外を見ればいつも通りのクラクションの嵐、市場では鶏が捌かれ、売り子の声が響きます。しかし、そんな騒音もお構いなしに、きらめく太陽のもとキャロルを歌って家族と過ごす一日。ムンバイのまちで迎えたクリスマスはちよつと不思議で心温まる経験になりました。



ミサの後、教会にて(左側が著者)

「ちはや姫」がついにデビュー！ 大阪・南河内が“いちご”でワクワク空間に

武藤健司：

地域産業イノベーショングループ



フォーラムで提供されたスイーツ

1月14日（いちごの日の前日）、グランフロント大阪にあるレストラン「旬穀旬菜（ロート製菓（株）が運営）」において、いちごの楽園スイーツフォーラムが開催されました。

フォーラムでは、モデルや野菜ソムリエが「いちごと美容と健康」の関連性について、いちご生産者が生産に対する思いを伝えるとともに、シェフによるいちごスイーツを参加者が試食しました。また、公募されていた大阪・南河内産（河南町や千早赤阪村）いちごのブランド名が「ちはや姫」と決まり発表されるなど、大いに盛り上がりました。

この事業は、今年度より大阪府が中心となり、河南町、千早赤阪村、JA大阪南、生産者の「公」民「農」が連携して行う「南河内いちごの楽園プロジェクト」の一環です。南河内地域では、5～6年前から新規就農



ちはや姫

「ちはや姫」は、南河内出身の武将である楠木正成の息女といわれている「千早姫」がモデルで、「お姫様のように愛らしく、華やかな美味しいいちご」という意味が込められています（品種は紅ほっぺ。1粒 40g 以上の大粒のものに限定）。

者がいちごの栽培をはじめ、現在は80アール、年間25トンのいちごが収穫されています。プロジェクトでは、いちごのブランド化、農商工連携、新規就農者の育成（農業塾がスタート！）などにより、南河内地域にいちご産地を形成することをめざしています。

面積あたりの収益性が高く、「朝採り」「新鮮」「完熟」が売りになるいちごは、都市農業である大阪農業に適しており、地元の直売所はもちろん、飲食店や小売店から多くの引き合いがあり、さらにはインバウンド観光の受け皿としてもニーズがあることが分かりました。新規就農者がチャレンジしやすい環境が整いつつあります。これからの南河内地域のいちごに注目です。
＊本業務は、地域産業イノベーショングループの原田弘之も担当しています。

築港で大阪府内の教職員を対象にまちあるき・意見交換会の実証実験を実施しました。

増見康平

建築プランニング・デザイングループ



天満屋ビル

大阪市の委託業務で、学校教育への建築体験プログラム導入可能性を模索・検討しています。

建築体験プログラムは、建築体験を通して学習促進、自分の住むまちの愛着の醸成、単純に建築に興味を持つてもらおうといったことを目的とする取り組みです。具体的な活動内容としては、模型作りや左官体験などの創作活動や、まちあるき後にワークショップを行うものなどがあります。学校への導入前に、教職員の方にこのようなプログラムを実験的に体験してもらい、ご意見をいただきました。

教職員は、まちあるきを通じて、建築単体の魅力のみだけでなく、まちの歴史や、その建築が建った意味などに興味関心



商船三井築港ビル

を持ち、建築を体験することが地域学習や、まちの愛着の醸成につながることを実感したようです。意見交換会では、教職員から「建築体験の取組みを学校で実施してみたい」という回答をいただきました。しかしその一方で、学校のカリキュラムへの対応や、準備時間、安全管理における人員の確保など、多くの課題が挙がりました。
学校教育への建築体験プログラムの導入実現のためには、今回の実証実験に寄せられた教職員の意見から、学校で建築体験プログラムを実験的に実施すること、そこから得られた建築体験プログラムがこどもにもたらす効果をていねいに周知していくことなどの活動の一つ一つ積み重ねていくことが大切だと感じました。

清酒発祥の地・伊丹で地元コラボの商品が新発売！

高田剛司：

地域産業イノベーショングループ



「グルメ&ダイニングスタイル ショー春2018」は、3日間で2万7千人以上の来場者（商社、卸売、百貨店、スーパー、ライフスタイルショップなどのバイヤー）を集めました。

2月7日～9日に東京ビッグサイトで開催されたこの展示会に、兵庫県の伊丹商工会議所も新商品をPRすることとなり、その出展のお手伝いをしました。

新商品は、いずれも伊丹老松酒造の「希少糖入り老松丹水あまざけ」と「希少糖入りマイヤーレモン酒」の2つです。

商品の中身は、米と米麴をベースに、大吟醸酒の酒粕を用いて風味付けをした甘酒に、同じく伊丹の企業である松谷化学工業の「希少糖レアシUGラスウイート」を用いて、すっきりした味わいになっています。展示会でも試飲してもらい、その味の良さや酒造会社が作る甘



酒であること、希少糖入りというプレミアム感などに対して、多くの方に興味を持っていただきました。

また、老舗の酒造メーカーが作るこれまでの商品群は、その多くが男性をターゲットとした商品イメージでしたが、今回は20代後半から40代前半ぐらいの「女性」をターゲットに、バード・デザインハウスと協力して、親しみやすいロゴやパッケージをデザインしました。これまでも好評をいただいている伊丹の農家が生産する「マイヤーレモン」（たみまるレモン）を使ったマイヤーレモン酒も、

同じく希少糖入りの商品にリニューアルし、デザインも一新しました。

これら2つの商品は、4月から販売開始です。お問い合わせは、伊丹老松酒造の直営店もしくはJR伊丹駅にある観光物産ギャラリーまで。

高知市「桂浜公園」パークマネジメントの取り組み

～高知の魅力発信拠点に～

堂本健史：

地域再生デザイングループ



太平洋を見据える坂本龍馬像で知られる桂浜は、年間70万人が来訪する高知県内でも有数の観光地です。

昭和50年代に土産品店や遊歩道の整備が行われてから、30年余りが経過しており、施設の老朽化や現在の旅行ニーズとサービスの乖離といった問題を抱えています。明治維新150年を迎える今年、高知市は桂浜公園を再整備、パークマネジメントを導入により、観光地としての魅力の一新を図っています。

アルパックはその実現に向けた官民パートナーシップの仕組みづくりをお手伝いしています。

このプロジェクトには、一時の整備効果に頼らない息の長い事業活動が必要と考えます。そのためには、全国大手の資本だけでなく、地元の大小事業者が参画し、盛り上げる仕組みが必



要です。私たちは、地域に入り込み、活動する人の声を拾い、巻き込みます。今後の桂浜公園の動きに是非、ご注目ください。

ところで、私はこの仕事で何度何度も現地を訪れ、美味しいものをたくさん戴きました。いうまでもなく高知の鰹は絶品ですが、それだけではありません。鯖にウツボ、文旦、ゆず、生姜、芋けんぴ、そして高知の食にあう地酒も多彩です。

桂浜という「観光地」を訪れ、知らなかった高知を体験し、気がつけば虜になっている。そんな場所になりたいと強く思います。

*本業務は、地域再生デザイングループの三木健治・石井努・浅田麻記子も担当しています。



木曽三川流域で新たな取組が動き出そうとしています

植松陽子：

サステナビリティマネジメントグループ



木曽三川流域自治体連携会議のサイト→



下流域で木曽三川の恵みを享受している名古屋市中では、単なる水源保全だけではなく上中流域への貢献を目的に、COP10を機に『水でつながる命』をテーマに「木曽三川流域自治体連携会議」を設立しており、現在4県下45自治体に参加し、意見交換や情報共有の場づくり、マルシェや商談会、シンポジウム、住民参加による水源保全活動などを行っています。また、名古屋市のふるさと寄附金の受け皿の一つとして「なごやの水源地・木曽三川流域連携事業寄附金」を用意し、寄附を流域の水源地保全活動に必要な用品の購入などに使っています。木曽三川流域の魅力

濃尾平野に流れる木曽川、長良川、揖斐川は、昔から木曽三川と呼ばれ、人々に豊かできれいな川の水の恵みをもたらしてきました。上中流域には豊かな森が広がり、木曽五木を始め木材のブランド産地にもなっています。一方で農林業の衰退など様々な課題も抱えています。

今年度からは、水環境を支える森を守るため、流域の地域材の需要を高めて森林資源を循環利用する仕組みづくりの検討が進められています。滋賀県湖東地域で活動している「一般社団法人 Kikio*」の協力を得ながら、地域材を使用した紙製品や木のファイル、鉛筆等の試作品づくりや企業・自治体との連携に向けたニーズ調査などを行っており、アルパックもそのサポートをしています。企業や自治体なども巻き込みながら、「木曽三川流域ならではの」の動きにつなげていければと考えております。※本事業は、畑中直樹と中川貴美子も担当しています。※Kikioの活動については、本誌177号（2013年1月発行）で紹介しています。（本誌では、びわ湖の森の木を使った「Kikioペーパー」を採用しています）



寄附への返戻品一覧

西脇のまんなかから「元気」を発信する

岡本壮平：

都市・地域プランニンググループ

みなさんは「播州織」をご存じですか？

播州織は、西脇市を中心とする北播磨地域の伝統産業の一つで、糸を先に染め、染め上った糸で柄を織る「先染織物」という手法が特徴です。国内先染織物の70パーセント以上のシェアを占め、海外有名ブランドにも多く採用されています。

西脇市はこの播州織で、戦後から高度成長期にかけて隆盛を誇りましたが、織物産業のグローバル化の中で次第に競争力が失われ、中心市街地は商店街の衰退、大型店の撤退、人口の減少と高齢化、空き家の増加と負のスパイラルに陥っています。「なんとかせねば」と、まちづくり会社「西脇TMO」が中心となって、地域資源を活用した観光・交流活動を振興しています。その追い風に、西脇市新庁舎がまちなかに移転新築されることになりました。「庁舎とともに整備される多様な機能を活用して、まちなかに活力を取り戻そう」という人々の声や、提案を踏まえ、ハードからソフ

トに渡る「まちなか活性化計画」の検討が進行中ですがなんと、それと同時に進行で先行事業が動き出しているのです。

まちなかを元気にしたい有志（デザイナー、産元、商工団体、行政職員等）が集まって、『播州織産地博覧会』として『播博（ばんぱく）』実行委員会を発足させました。詳細は春以降のプレス発表に譲りますが、「10を超える産元の出展」「めったに見れない生地が多数」「うれしい量り売り」など、播州織ファンのみならず趣味でハンドメイド等をされている方々にも垂涎のイベントになること間違いなし！の企画です。場所はまちなかのコワーキングスペースとその周辺の空き店舗を活用、開催は5月27日（日）です。近くの方もはるばる遠くの方も、是非お運び下さい！



台湾921大地震から復興した山間集落の今

視察報告

中塚一：
大阪事務所長

昨年11月に奈良女子大学等と共に、台中の朝陽科技大学、東海大学にサポートいただき、複数の復興集落を訪れる機会がありました。

1999年9月21日。台中の南投県集鎮付近を震源として発生したマグネチュード7.3の大地震は、死者・不明者2,500人弱、全壊建物約52,000戸、半壊建物約54,000戸等、その被害は主に中山間部に集中し、大規模な斜面崩壊が多発しました。

約7年前の紀伊半島大水害、約2年前の熊本大地震と中山間部の災害復興を支援していることもあり、今回の視察の機会となりました。以下では、産業（営み）と雇用の創出による協働型復興むらづくりの先進事例と言われている2集落の「約18年後の今」を紹介します。

■桃米生態村〜カエルとトンボによるエコツーリズム〜



桃米生態村の生態解説員

南投県埔里鎮の桃米里では、災害前には竹や筍等の生産を行っていたが、農産物の不振により若者層の流出が続いていました。地震により全戸数約360戸のうち約3分の2が全壊し、人口流出にさらに拍車をかけることとなりました。災害後、住民による討論会を重ねる中で、専門家が地域の「宝」としてカエルやトンボ等の生態系の価値を提案しました。討論会では、反対・対立など様々な意見がありましたが、学習活動等を重ねることにより「エコツーリズム」にテーマを絞って復興事業を展開することを決意します。その後、住民参加による生態調査、担い手となる解説員養成、民間宿泊施設の整備、公共基金（ファンド）等により集落全体で生態村（エコロジビレッジ）として展開していきます。エコツーリズムの成功の一方で、地域内の利益の衝突や妬みをも生んだようで、まだまだ個別事業者の意見対立は解消されていないとの声も聞きました。

■華山村〜台湾コーヒーの故郷+自然と土石流防災の教育の場〜

大量の土砂や岩により被害を受けた雲林県華山の華山川と京橋川の上流部の集落。災害前から「台湾コーヒーの故郷」として、コーヒーカーニバルが開催されていました。しかし1988年の大地震及び1990年の大水害の2度の土砂災害により、集落及び茶畑が深刻な被害を受けました。復興に際しては、住まい



桃米生態村のピオトープ沼

の復興から公共施設の復興、産業の復興へと集落の復興に向けてステップを踏んでいきます。特に、公共施設の復興や産業の復興に際しては、ホテル等の自然環境の維持・創出をテーマに、土石流制御の安全性と機能性を確保しながらも、生態学的な景観デザインや土石流防災の解説や教育の場として、地域の新たな雇用機会を創出していました。

■阪神・淡路〜台湾921〜中越〜紀伊半島〜東北〜そして熊本へ〜

「21世紀は巨大災害の時代」と思える程、1995年の阪神・淡路大震災後、自然災害による被害は確実に巨大化、複雑化してきています。特に、台湾や紀伊半島、熊本等では、中山間



華山村の生態解説員



土石流防災の解説看板

部に被害が集中しました。これらの地域は、災害以前から地域産業の衰退により人口流出が進んでいたのが、さらに災害によりその傾向が一気に進んだと言えます。

台湾の2集落では、復旧復興のプロセスにおいて、外部の支援団体等の支援も得ながら地域の「宝」を再発見し、地域全体でその価値を共有することから始めています。そしてエコツーリズムや防災教育等の視点を採り入れた活動や事業を展開しながら、小さな産業（営み）として地域経済を循環させ、持続可能な地域づくりに向けた新しい雇用の場を創出しているのが印象的でした。

熊本地震においては、これからハードとしての住まいの復興や公共施設の復興が本格的にスタートしますが、常に文化の復興や産業の復興の視点を頭にいれて、総合的な集落の復興を支援していきたいと考えております。（追記：南阿蘇村立野地域では、この1月に2年ぶりの「どんどや」が、約150名の参加により行われました）

利活用活動の意義と経緯

平成 17 年 (2005) 3 月、京都府庁旧本館利活用検討委員会 (委員長：井口和起・元府立大学長) の報告を受け、利活用プロジェクトが始まりました。京都府は NPO 平安京と協議を重ね、「府民に親しまれる府庁のシンボル」を目指し、平成 20 年 (2008) 10 月 1 日、「旧本館つくりシンポジウム」で、利活用活動がスタートしました。

京都府庁は、徳川幕府の京都守護職一松平容保の屋敷跡。明治の文明開化の時代になり、松室重光設計になる旧本館は、煉瓦造、ネオ・ルネッサンス様式。以後の庁舎建築のモデルになりました。明治 37 年 (1904) の竣工から 100 年目に重要文化財になりました。

文化財資産活用の条件

旧本館は、京都府の資産です。維持・修復の費用は公費で、議会で議決され、チェックを受けます。利活用を始めた時、旧議場は府政情報センターであった他、およそ三分の二が現役の事務室として使われていました。

公開されていた旧知事室の家具調度も立派です。七代目小川治兵衛の作庭になる庭もけっこうな舞台です。殊に、中庭のしだれ桜が素晴らしい。

文化財建造物は、建築基準法は適用除外ですが、消防法の適用は受けます。文化財保護法では、火の使用や飲食は禁じられていませんが、消防署の指導・監督を受けます。シンメトリーな建築では、慣れた人でも、場所・方角に迷うことがあります。一般公開には、サイン・照明の工夫が必要です。



山田啓二知事に表紙題字を頂き、府庁旧本館利活用応援ネット (代表・金井萬造) が、初動から旧議場修復までの約 8 年間の活動記録を出版しました。

文化資産活用のシクミ

「利活用応援ネット」は、公と民が協働する乗り降り自由のプラットフォームです。毎月の定例会議の役割は、企画・調整・評価です。来訪者数、アンケート分析は「次」に活かされます。

春の観桜祭、秋の観芸祭が定番になりました。正庁での連続講座は、門川大作・京都市長の観光講座で始まりました。府庁界隈のお店などを巡るツアー、御所の一般公開との連携も広がりました。入れ替わり立ち代わり参加した団体は 100 を超えました。旧議場修復に団体長が署名活動をし、議員さんも応援して下さいました。

結婚式や映画・TV 撮影は、府直営で有料。利活用は無報酬・無料ですが“お志”は頂き、文化財保護基金に寄付します。こだわりマルシェのように、テントなどの設備を持ち、収益を伴う事業は、実行委員会が当たります。

愉しく、面白く

お祭のオープニングは、府警音楽隊、カラーガードが盛り上げて下さり、平安騎馬隊のお馬さん、ゆるキャラの「まゆまる」は、子どもたちに大人気。桜守・佐野藤右衛門さんが、中庭の山桜が新種だと見つけ、守護職に因んで「容保桜」と命名。ちょうど NHK「八重の桜」ブームでしたので、命名式には会津若松から市長さんが地元新聞社ごとお越しになりました。

利活用応援ネットは、審議・決定のアッセンブリー型定例会議とともに、フリーに一杯飲んで談論風発のフォーラム型ミーティングも持ちます。この方が、公と民の立場の違いを理解し、アイデアをぶつけ合う、エネルギーのみなもとになったかもしれません。

文化遺産の価値を高める

目標の一つ、旧議場修復は、平成 28 年 (2016) 3 月、第 2 期工事をもって完成しました。2 階傍聴席、照度を上げたシャンデリアもできました。

文化財建造物は、綿密に調査し、肝心な所は、ちゃんと修復しないとけません。施工する職方のワザも大事です。そのココロが、現場から設計、議会審議、知事決裁とすべての経過で貫かれ、文化遺産の価値が高まりました。屋根の修復は終わっていますが、耐震補強の検討、地下空間の整備などが残っています。

利活用応援ネット定例会議は 100 回を超えました。修復成った旧議場の利活用も進んでいます。8 年ほど、利活用応援ネットの座長を勤め、金井座長に引き継ぎました。退任記念に旧本館の模型を頂き恐縮です。ありがとうございます。

タウンマネジメントを実践する九州の住宅地（城野地区・日の里地区）を視察しました

絹原一寛

都市・地域プランニンググループ

「シェアタウン」で注目を浴びる小倉から電車で15分程度の住宅地、城野地区。先導的、実験的なタウンマネジメントで「第1回先進的まちづくりシティコンペ」で国土交通大臣賞を受賞されました。まちのタウンエディターのお一人である柴田建先生（九州大学）のコーディネートで、このたび視察が実現しました。

「シェアタウン」とは、住宅地の各主体が、少しずつ、まちのためになることを「シェア」して居場所を作るユニークな試み。地区内の病院のホール、薬局ビル・分譲マンションの共用空間を地域住民らが活用したり、まちかどに休憩スペースやガーデンがあったり、公園に近接してみんなが活動できる菜園があったりと、まちを楽しむ装置（シェアプレイス）があちこちに広がっています。また、中央の公園に隣接する活動拠点「TETTE」では、まちの部活としてDIYや料理教室などに使われています。まちの運営は一般社団法人「城野ひと・まちネット」が担い、住民や事業者が全員

加入、費用負担のもと、管理運営を実践されています。住宅供給は途上で、これからが本番というところですが、マネジメントの考え方の浸透、費用負担や還元のあり方、牽引する担い手など、課題は全国的にも共通するところだと感じた次第でした。

また、昭和期に建設されたニュータウンで、再生に向けた取り組みを進める宗像市の住宅地、日の里地区もあわせて見学。JR東郷駅そばの店舗を改修して新設された「CoCokara ひのさと」では、地域住民の活動拠点としてにぎわいや交流を生み出すとともに、在宅看護センターや託児所チャイルドハウスも併設。団地の公園内にUR都市機構と東レの協働で設置されたビニールハウス「日の里ファーム」はインパクト大でした。

いずれも、住宅地のタウンマネジメントにさまざまな工夫が凝らされており、勉強になりました。これからも注目していきたいと思います。



くらしの製作所 TETTE（城野）



CoCokara ひのさと（日の里）



日の里ファーム（日の里）

アルパックのリクルートサイトを公開しました

坂井信行：

メディア委員会

アルパックのウェブサイトの中に、2019年度の採用情報を掲載したリクルート専用サイトを新しく公開しました。最新の求人情報や会社説明会、インターンシップなどの採用に関連したイベント情報のほか、先輩社員へのインタビューや社長のメッセージを掲載しています。

インタビューは、アルパックへの就職に関心持っていただいた方に、アルパックのありのままの姿を感じていただけるよう、さまざまな個性、経歴を持った6人の先輩社員が本音を語るというスタイルとしました。それぞれが今の仕事に関わるようになったきっかけや、アルパックでまちづくりを仕事とすることに対する思いを熱く語っています。社長のメッセージも若い社員のインタビューに刺激を受けたのか、熱を帯びたものになっています。

これから就職活動をはじめの学生さんたちに、社員の思いがとどきますように。もちろんインタビューは一般の方にとっても興味深くお読みいただけるものとなっています。ぜひ一度ご覧ください。

<http://www.arpak.co.jp/recruit/>





アルパックのルーツを巡る旅

鮎子田稔理：
建築プランニング・デザイングループ

例年になくしづとい冬將軍が居座り続ける中、「アルパックのルーツを訪ねる旅」として但馬方面へ所員一同行って参りました。

但馬地域は兵庫県北部に位置し、山陰海岸国立公園や水量豊かな円山川など抜群の自然環境に恵まれています。降雪量が多く、但馬地方でよく言われる「弁当忘れても傘忘れるな」との言葉をこの旅でも実感しました。



城崎温泉 地藏湯

多くのプロジェクトに関わってきました。特に城崎は創業当初より

縁が深く、故西山卯三京都大学名誉教授の下、城崎温泉のまちづくりから外湯の設計にも携わり、今も「鴻の湯」「地藏湯」は当時の姿のまま地元民や観光客に親しまれています。

元々城崎は地形上の理由で田畑が少なく、貴重な資源である温泉源が湯島区民の共有財産として大切にされてきました。温泉源は集中管理され、旅館の内湯や外湯すべてに圧送式パイプで温泉が送られています。まちを貫く「共存共栄・互恵互助」の精神は大正14年の北但震災からの復興にも生かされ、まずは外湯の復興から始まり、まちは不死鳥のようによみがえりました。今回宿泊した油筒屋（ゆとうや）旅館の門構えも震災を教訓にコンクリート柱で造られています。

まちの中央を流れる大谿川に掛けられた弓型橋にもそれぞれ個性

あふれる欄干や親柱がデザインされています。この情緒ある景観をじっくり楽しむには少し雪が多すぎましたが、暖かくなる頃には雪が桜に変わり人々の心を和ませしてくれることでしょう。

今回の旅では城崎だけではなく、出石で伝統的建造物群保存地区の街並みを散策した他、コウノトリの郷公園、浜坂、湯村温泉を巡りました。浜坂では、新温泉町山陰海岸ジオパーク館 館長谷本勇氏の楽しく興味深いジオパーク解説を拝聴し、湯村温泉では、元役場職員の中村さんと短い時間でしたが旧交を温めることができました。たくさんの人や地域に支えられて歩んできた50年の足跡を駆け足で振り返り、さらなる一歩を踏み出していきたいと思います。



ゆとうや旅館の門構え



谷本氏によるジオパーク解説



「レターズ アルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates・Kyoto
<http://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F

TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F

TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南3-5-11 スクエア九段ビル1F

TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221

九州事務所 〒810-0802 (株) よかネット:福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パルビル8F

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。